



ユーモア3 榎本栄次

やくざのおじさんは、涙を流し始めた。ちょっと待ってくれ、どうなっているんだ。キリスト教のことを何も知らない人、全く無縁のようなやくざのおじさんが、拙い私の話を聞いて、何がわかったというのだ。そして何を泣いているのだ。

神学生である自分としては、キリスト教信仰の根本は「贖罪論」であることは知っている。キリストの十字架によりどんな罪も許される、という話をした。しかしいくら解説を聞いても自分の存在をかけて涙するような理解はできていない。適当に分かったつもりでいるしかなかったのが私の実態であった。にもかかわらずこの人はいっぺんにすべてを理解してしまったような顔をしている。

「ああ、わしはこれまでいろんな悪いことをしてきた。ウジ虫のような者や。こんなわしのために、代わって罪をかぶってくれるというのか。地獄に落ちるんでなくて、全部許してくれるのか。そのためにキリストは死んでくれたと言うのか」。

長谷川長吉さんは私の話を聞いて体を震わせ涙を流している。彼はこれまで教会に行ったこともなければ、聖書を読んだこともない。キリスト教入門講座を受けたわけでもないし、難しい教義学を学んで訳でもない。そんな彼が「あなたの罪は許された」という一言でキリスト教のすべてを理解したというのか。

使徒パウロが言う「神は、知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選んだ・・・」

(コリント I :1:27) のとおりに思った。信仰の世界では「分かる」ということは、どれだけ勉強したかということとは別らしい。

いい加減な私の話を聞いて、私よりも深いところで理解し受けとめているのだから。そうは言っても、一時的なことかも知れない。一週間経てばころっと変わっているということもある。今日のところはとりあえず、「また来ます」と言い残して病室を後にした。

教会に帰って報告した。はじめ警戒していたこと、呼び止められたときの動揺、長谷川さんの告白。涙・・・教会への期待など、報告すると、牧師は「そうか。すごいな」と言って、喜びを共有した。

次の週訪ねると、楽しみに待っていてくれた。この日は前よりも真剣に教会のことやキリスト教のことについて聞いてくれた。この前の顔と違って優しく感じた。また罪の許しについて泣きながら感謝をされた。得意の尺八を聞かせてくれ、「よくなったら、教会に行くで。子分たちも連れて行く。賛美歌を尺八で吹きたい」などと言った。奥さんがちょっと話があるというので病室を出て待合室で話を聞いた。

「ありがとうございます。今のような主人は初めてです。優しくなりました。喜んでいきます。ただ主人の命はもう僅かなのです。キリスト教を信じて別人になっています。このまま逝かしてやりたいのですが、最後に洗礼を受けさせてやってほしいのです。お願いします。牧師先生に頼んでください。

つづく

=ことば=

大切な三つのこと

小久保 正

しばしば知的真理探究の重要性が強調される。それは確かに自然と社会を理解する鍵である。しかし知的真理の探究には限界がある。知識は、人を誇らせ、高ぶらせ、時に他を支配する武器にすらなる。

内村鑑三は、知的真理の探究に併せて、読むべきものは聖書、学ぶべきものは天然、なすべきことは労働と、三つのことを強調した。

この季節、枯れたようになっていた木々が芽を吹き、野の草が色とりどりの花をつけ、自然は豊かな命の源泉であることを感じさせる。しかし一方では、自然は激しく地を揺らし、命の存続を脅かす存在でもある。自然と共に生きることは、自然のやさしさと厳しさに身を晒して生きることであり、人よ奢るなかれとの警告を聴きつつ生きることである。それは、人を謙虚に、柔和にする。

現代では、できる限り手間を省き、短時間に自動的に同じ結果を出すことが重んじられる。しかし、手間暇かけて、汗水たらしてひとつひとつ丁寧に辿らなければ、見つからないこともある。それにより途中でだけ重要な役割を果たし、最後には消えていくものの存在にも気づかされる。労働を重んじる生き方は、結果より過程を大事にする。それは、傷ついた人を癒し、失われたものを回復する。

聖書は、パレスチナの弱小民族のイスラエルの民が、大国に翻弄されながら、歴史と世界の意味を問いつつ、自分たちの存在意義を尋ねながら歩んだ跡を記したものである。人は、この書と対話しつつ生きる時、希望を見出すことができる。これら三つのことに裏打ちされて初めて、知的真理の探究は意義あるものとなる。

投稿 きらら俳句

- | | |
|------------------------------|--------|
| ○曇天に波泡立ちて春を待つ | 小久保枯骨 |
| ○背負う子の声も楽しき風車 | 榎本虚舟 |
| ○煙立つ野焼きの果ての月夜かな | 松本茶香 |
| ○階下よりコーヒーの香や春の朝 | 佐々木公女 |
| ○一平（ひとひら）を蹲（つくばい）に
浮かべ花飾る | 原 岳 |
| ○千年の闇を焦がすや御松明 | 富永周豊 |
| ○玄関に春泥の後孫の靴 | 佐々木小次郎 |
| ○思い出の窓辺にいつもシクラメン | 松野洋子 |

関西セミナーハウス活動センターへの賛助・寄付金

2018.3.1-3.31 順不同・敬称略

北垣 宗治、森口 克洋、網野 俊賢、金山 顕子、
山本 知恵、鳥井 清司、水戸 潔、桃山アシュラム
(廣瀬 芳之、佐々木 紘児、米澤 敏子、藤本 和子、
南 和子、君村 千代子)、日本キリスト教団宇治教会、
日本基督教団京都教会、フェリックス R.アインゼル、
日本キリスト教団洛西教会

ありがとうございました。

関西セミナーハウスの四季だより

- 常盤木落葉 - 茶室より

今年の春はいつもより早く過ぎていくように思います。駐車場の周りのしだれ桜や客室から手を伸ばせば届きそうなソメイヨシノも終わりを告げています。

そんな中、冬に蓄えたエネルギーを少しずつ出している新芽がどんどん伸びてきています。ふと気がつけばいつもより早く常盤木落葉が散り始めました。

常盤木とは常緑樹のことです。いつも緑のような気がするけれど、この時期に新芽が伸び、古い葉を落とします。茶室の庭は、はげどもはげども落葉は降ってきます。そんな自然に教えられるのは新しいエネルギーによってつながっていること。自然の中では当たり前のことです。

そのリズムがずれると木は枯れてしまうでしょう。

常盤木落葉と格闘する中、鶯の声に手を止め美しい声に聞き入る時があります。

松本 典子